20.「しあわせの住み処」

江古田、三軒茶屋、深沢、池尻大橋、南青山、そして、ここ。

リビングの窓の向こう一面に、緑が広がっている。1999年の夏の終わり、YUKIは住み心地の良さそうな今のこの部屋を見つけた。

NiNaやchara+yukiで、荷物の整理をする暇などスケジュールのどこをどう見ても見あたらなかったが、今年の春先からずっと、引っ越ししたい病を患っていた彼女としてはもう限界だった。

（荷造りなら、きっとなんとかなるさ。今までもそうだったもん）

強行軍で住み処を移すことには慣れている。

パワステ初日に部屋の水道管が壊れて、いきなりのホテル暮らし。

桜の樹が見えるあの大好きな部屋からは、喉の手術が決まっているというのに短期間で物件を探し、入院している間に引っ越してしまったほどである。

（……でも、あれが良くなかったかな。失敗だったな、あの引っ越し）

そうなのだ。不思議なもので越してからというもの、YUKIはあまり部屋でゆっくりすることがなくなった。喉の手術を終え、退院してすぐに海外へ出かけていたとはいえ、日本に帰ってからもどうも部屋が馴染まない。

心地のいい部屋にしようという気持ちにならないのである。

引っ越してきたときのまま、放ってあるものもある。整理したいものがたくさんあるというのに、気が進まない。部屋が片づかない。落ち着かない。何より、その部屋は、ひとりでいられない部屋だった。

新しいこの部屋に越してからというもの、YUKIの生活は180度変わった。自炊して、掃除して、自分で自分の生活に密着しようとした。

ひとりでいることを受け入れようとYUKIは思った。

だからなおさら、居心地のいい部屋にしたかった。

実際、新しい部屋はすぐにYUKIに馴染んだ。

ひとりで映画を観たり、音楽を聴いたり、お風呂上がりにビールを飲んだりといった、そんなありふれたことが当たり前に楽しい。

ごく普通の生活を普通に送ることのできる部屋。

こんなささやかなお願いが、前のあの広い部屋では叶わなかったのはなぜだろう？　と不思議に思ってしまうぐらいだ。

「YUKI、大晦日どうすんの？」

「あのさ、あたし、今年は家にいようかなぁって思ってるんだ」

「え、ライブとか観に行かないの！？ 1000年代最後の年越しだよ？」

「うん。でも、だから、ひとりで家で年を越そうかなぁと思ってさ」

あれこれプランはあったけれど、YUKIはそうしようと決めていた。

じゃあ、31日ぎりぎりまで一緒に過ごそうよ、ということになり、友達カップル２組がYUKIの家へ遊びに来ることになった。

大掃除を済ませ、年越しそばとおせち料理と、お雑煮の支度もしておこう。時間なら今日はたっぷりある、茶碗蒸しも作っちゃおう。

今年はスケジュール帳の整理も、2000年がやってくる前に済ませておこう……。

昨年の大晦日はオールで遊んで松屋で朝定を食べて1999を迎えた。正月は家でのんびり過ごしたが、お休みがあったのは１月だけだ。

NiNaが始まってからは、この部屋に引っ越しするまで、まるでお休みがない。自分でもびっくり。

夏の終わり、JUDY AND MARYを始めようという話が出ている。

そのころにはチャラと一緒にchara+yukiもやっている。

（ミーン・マシーンもうちょっとやりたかったなあ。ドラムの練習も）

ギャルバンは楽しい。高校生のころのような、あの理屈抜きの楽しさはこういうバンドでしか味わえない。

打ち合わせと称して、いつも飲んで食べて大笑いで終わってばかりのsleepも、今年は動いた。

（ひとつ仕事をしたね。sleep Tシャツ作った。イベントもあったな）

ニューヨークにウッドストック。９月のハワイではケイトに再会した。ホノルルで観たケイトたちのワールド・ツアーでYUKIは最前列で踊りまくり、NiNaの最後のレコーディングが終了したときには、これでアルバムが完成したんだという充足感とそれまでの過程がいっぺんに思い出され、佐久間正英と握手を交わしながら、泣きに泣いた。

１２月のロサンゼルスでは、JUDY AND MARYで久々に４人そろってビデオのシューティングをした。

（あたしだけ時差ボケがつらくて、ダメだったなあ。楽しめなかった）

撮影が終わると食事にも行かずに、YUKIは眠って眠ってずっと眠って過ごした。そういえば、シューティングでは頭をガンガン振りすぎて、気分が悪くなった。調子にのってやりすぎるのは、彼女の悪い癖だが、そういうところはいくつになっても変わりそうにはない。

1999年、YUKIは多くの人に出会った。

初めて一緒に仕事をする人が多かったからか、なぜか、デビューしたころの感触を思い出す場面がよくあった。

始まりがあれば、いつか終わりは訪れる。それを望む、望まないにかかわらず、出会いがあれば、別れは必ずやってくる。

その一方には、ずっとつながったまま、形を変えながらYUKIのなかで続いているものも在る。ただ普通に、自分のそこに在る大切なものを、ほんのいくつかだが、今、確かに、彼女は持っている。

1999年の手帳の最後のほうに、YUKIはふと目を止めた。

ピアスの穴がふさがりそうだ。

激動の97年、98年、99年。

果たして2000年のYUKIは何を動かすのだろう。

来年は28才になるんだなぁ。すごいなあ。

別れるのはつらいけれど、

しあわせを恐れない気持ちが強いなっていくのが好きだ。

何かの原稿を書くために、自分自身の90年代を振り返ったのだろう。そうか、そうだね、と、YUKIは自分の残した言葉に、ひとり頷く。

しあわせのこの住み処を選んだことを、YUKIは後悔していない。

ピンポーン、ピンポーン。

ドア・ベルが鳴った。モニターを見ると、ワインを抱えた友人たちが、わざとふざけた顔を見せている。

「今、開けるよ」

YUKIは用意した料理を振る舞い、誰かがテレビのスイッチを入れる。

「紅白観よう、紅白！」

さっきまでしんとしていた部屋の空気を、友人たちの賑やかな声がかき混ぜていく。年末恒例の特別番組を流しながら、<年忘れ、ワインでしゃべり倒し大会>といってもおかしくないほど、YUKIも仲間も賑やかだ。ブラウン管に向かって、みんなで好き勝手なことをしゃべる。

今年、世の中を騒がせた出来事から、自分たちに起こった小さな事件、果ては恋人同士のつい昨日のささいな喧嘩についてまで、ありとあらゆる話題を肴に、1999年最後の夜をYUKIは友人たちと一緒に過ごした。

「よし、じゃあ、帰るね。YUKI、来年もよろしく」

「うん。今年もありがとう。来年もどうぞよろしく」

そう言ったとたん、YUKIはなぜだか泣けてきて、見れば友達ふたりも泣いている。

「なーんでないてんだろ、へへ、おかしいね」

笑いながら抱き合って、けれども涙だけが止まらない。

これが1999年、最後の涙。もう泣かないのだ。

「そいじゃあね。良いお年を」

「良いお年を」

鼻の頭を真っ赤にした友達とその彼氏たちを見送ると、誰もいなくなったりビングのソファにYUKIは身を沈めた。

つけたままにしているテレビには、サザンオールスターズのカウントダウン・ライブの模様が映し出されている。

<カウント・ダウン！　10、9、……>

（あ！花火だ！！）

遠く神宮の空のほうに、冬の花火が咲いている。

夏に見る目が爆ぜるような原色の眩しさと違い、冷えた冬の空のなかに束の間、輪郭を浮かべると、閃光の跡だけ残しながら消えていく。

1999年から、2000年へ。

「明けましておめでとうございまーす！」

静まり返った新年の街に、YUKIの声が響く。

夜の風が、上気したYUKIの頬をそっと撫でていく。

（今年もよろしく！！）

花火がまたひとつ、打ち上げられていく。

——「Girly Folk完结」